

也、八月四日、或人語云、御即位又可有延引歟、其謂者、武家御裝束、夏分御新調不事行、又三十萬疋之殘用途猶以闕如也、又近日右京大夫可遣勢於播磨國云々、然者又不可有御警固之儀、旁先可有御延引之由、以伯三位、今日從室町殿被申入云々、勅答之趣、延引及度々、外聞實儀、餘以不可然、就是非可有御申沙汰之旨、及御問答云々、有無未定也、度々延引誠以勝事也、但武家更無御疎略事也、十日、午刻向甘露寺亭、御即位間事申談了、御延引十月治定云々、

〔元長卿記〕大永元年○永正十八年二月十一日、廣橋大納言、御即位用途萬疋從室町殿被進云々、舊冬畠山次郎進上御折紙被付進之由御申之外也云々、予申云、近來一向不及沙汰、以此次當日諸下行分有之上者、御修理方爲後日之沙汰被遂行、可入魂條可然候由再三口入同心、然者以式部少輔可達條可然歟、仍召光將三位、內儀相達可披露之由申間則相談了、十四日、持齋式部少輔來、條々相談、廣橋在此廣入夜室町殿御同心之由申送、珍重々々、

〔二水記〕永正十八年○大永元年二月十四日、武家被進即位料事、從武家萬疋被進、來月御即位可爲治定之由、傳奏令伺公申入了、

〔高代寺日記〕大永元年三月廿二日、即位ノ禮ヲ行ハル、兵亂故二十餘年遅々セリ、今度本願寺ヨリ即位料ヲ調進ス、是レ堯空ノ計ト沙汰アリ、依テ本願寺門跡號ヲ賜フト言傳フ、

〔加越闘諍記〕明應九年十月廿五日、皇太子○後柏原踐祚あり、然りといへども、京都猶以亂れ、細川大心院生害して後、彌々諸國に合戦止むひまなく、公方の御動座敷に及ぶ、依之公家武家力衰へ、御即位あるべき様もなく、御踐祚ばかりにて年月を過させ玉ふ、されば爰に三條西殿實隆公如何にもして御即位を成し奉らんと武家を頼み給、並其比僧の中の大福者なれば、山科本願寺へ被仰下ければ、本願寺諸檀那を勧め、壹萬貫の金子をさげ奉る、叡感の餘りに、行成卿の三十六番の家を集を自筆にかゝれし歌書を本願寺に下し賜はる、其の上永代子々孫々准門跡に補任せら